

## 五井蘭洲と崎門の関係について

清水則夫

懐徳堂と崎門とは、いずれも朱子学をみずからの思想的基盤としたが、懐徳堂の側では崎門に対して批判的だったと言われる。これは五井蘭洲においても同様で、先行研究では、蘭洲と崎門学とは相違点を強調されるのが常であった。

しかしその一方で、彼らの主観を度外視して資料をみると、蘭洲は山崎闇斎の編著を講義したのみならず、思想内容においても一部の闇斎後学と多くの共通点を持つことがわかる。本発表はこうした共通点を具体的に検討し、従来指摘されてきた相違点を見直し、両者の関係を改めて位置づけることを目的とする。そのうえで、18世紀の日本における朱子学者の思想傾向を明らかにする一助としたい。

蘭洲は崎門学者の人間性が刻薄だと批判するが、しかし山崎闇斎の朱子学解釈と垂加神道には関心を持ち、随時参照していた形跡がある。『伊洛三子伝心録』『仁説問答』『玉山講義附録』については講義も残し、また垂加神道諸家の説には言及する例が多く、浅見綱斎の『靖献遺言』にも理解を示した。

しかし既に指摘があるように、蘭洲は垂加神道の極端な日本中心主義には同意しなかった。これは両者の相違と見えるかもしれないが、実は崎門学者にも同様の思想を見出すことができる。元禄ごろから、闇斎後学の中でも、垂加神道には批判的な一方で、しかし神儒一致を主張する例が増えている。したがってこの点も蘭洲と崎門との相違点ではなく、むしろ類似点と見るべきである。

こうした、当事者の意図を超えた類似は、これが当時の朱子学者にとって典型的な思想傾向の一つであることを示しているのではないだろうか。蘭洲の思想は、五井持軒以来の家学に淵源するとされ、またその後世への影響も懐徳堂の後学に対するものが論じられてきた。しかし視野を広げて考察してみると、蘭洲と一部の闇斎後学との類似は、当時の朱子学者が学派や学統の枠を超えて共有していた、同時代的問題を反映したものだと考えられる。